

大伴坂上郎女の「怨恨歌」

一

大伴坂上郎女の怨恨の歌一首 并せて短歌

おしてる 難波の菅の ねもころに 君が聞こして へ君之

聞四手 年深く へ年深 長くし言へば へ長四云者

まそ鏡 磨ぎし心を 許してし その日の極み 波のむた

なびく玉藻の かにかくに 心は持たず 大船の 頼める

時に ちはやぶる 神か放けけむ うつせみの 人か障ふ

らむ 通はしし 君も来まさず 玉梓の 使ひも見えず

なりぬれば いたもすべなみ ぬばたまの 夜はすがらに

赤らひく 日も暮るるまで 嘆けども 験をなみ 思へど

も たづきを知らに たわやめと 言はくも著く 手童の

音のみ泣きつつ たもとほり 君が使ひを 待ちやかかねて

む (4六一九)

反歌

はじめより長く言ひつつ へ長謂管 頼めずはかかる思ひに
あはましものか (4六二〇)

井ノ口 史

怨恨歌は、坂上郎女の作の中でも言及されるところの多いものであるが、解釈の定まっていなない点もいまだ残されている。例えば、「長く言ふ」という語句は、傍線で示したように、長歌に「長くし言へば」、反歌に「長く言ひつつ」と繰り返し歌われており、怨恨歌の理解のために重視されるべきものである。このように「長くし言へば」「長く言ひつつ」の訓みを採る以上、「長く」を「言ふ」にかかると、言う期間の長さの表現であると解釈すべきである。にもかかわらず、引用の助詞トを補い「『長く』と『言ふ』」として、将来にわたる誠実を誓う男の言葉である

と解釈する注釈書も少なくない。それは、坂上郎女の次の歌と関連を有するものと思われる。

・千鳥鳴く佐保の川門の瀬を広み打橋渡す汝が来と思へば
〔奈我来跡念者〕
(四五二八)

・恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽くしてよ長くと思へば
〔長常念者〕
(四六六一)

五二八歌の結句は、「汝が来」と「長く」との意を併せ持つ。つまり、「長く」と思ふ」という句が、郎女自身によって二度用いられているわけである。一見したところ、怨恨歌の「長く言ふ」という表現は、これに類似しているように思われる。しかし、それはあまりに限定的な見方であり、例えば、この句が長歌の前半においてどのように位置付けられるべきかといった視点に欠けているのではないか。この直前には「ねもころに君が聞こして」という句が置かれ、「聞こす」（おっしゃる）と、「言ふ」とが重複して用いられている。仮に「長く」を男からの愛の言葉であるとするならば、男の濃やかな情を表す「ねもころに聞こす」との関係はわかりにくいものとなる。「長く言ふ」の解釈にあたっては、長歌前半の構成といった視点をも含めて再検討する必要があると考えるのである。

二

まずは、「年深く長く」に関する従来の見解を整理しておく。おおよそ次の三通りに分類できる。すなわち

ア「年深く長く」全体を相手の発言として括るもの

イ「年深く長く」を「言ふ」の修飾語であると見、「長い間言い続ける」とするもの

ウ「長く」のみを相手の発言内容であるとし、「年深く」が「言ふ」にかかるとするもの

である。アの立場からの言として『全註釈』が、「年深く長くは、将来永久に変わるまいの意。長クの下に省略された語がある」と説く他、『古義』や『全釈』も、未来にわたる誓いであるとする。しかし、後に触れるように、元来漢語としての「年深」も、万葉集中の「年深し」も、過去から積み重ねて来た時間の長さの表現であることが確認できるから、この歌のみ、「年深く」を未来への時間として解釈するのは妥当ではない。よって、アは成り立ち得ない。イは「年深く長く」を「言ふ」の修飾語であると見、「長い間言い続ける」とするもの。語句のつながりから見れば最も穏当で、「年深く」は、年多くで、何年にもわたっての意。…(中略)…『長くし云へば』は『し』は強め。長い間いたので、夫婦関係を結ぶに至るまでの、長い交渉

期間をいつたもの」とする『窪田評釈』、また『井上新考』
『金子評釈』『私注』『新大系』などがこの立場である。

一方、ウのように、「長く」を相手の発言内容であるとし、かつ「年深く」が「言ふ」にかかるとする説がある。

例えば、『和歌大系』には「長年にわたつて末長くとおっしゃったので。年深くは過去の年月の重なつたことを言う」とある。しかし、「長く」を相手の言葉の引用として理解するには、「長く」の下に助詞トを必要とするのではないか。坂上郎女の歌を一例として挙げると、

来むと言ふも来ぬ時あるを来じと言ふを来むとは待た
じ来じと言ふものを (4527)

〈将_レ来云毛 不_レ来時有乎 不_レ来云乎 将_レ来常者不_レ待 不_レ来云物乎〉

のようにトを訓み添えるのが適当であろう。ところが、六一九歌では原文に「長四云者」とあり、強調の助詞であるシが表記されている。「云」字に引かれて引用のトを訓み添えるのであれば、「長く し」と言へば」となるはずで「長く」とし「言へば」と訓むのは不適当であろう。また、家持の歌では、

なかなか絶ゆとし言はば〈絶年云者〉かくばかり息
の緒にして我恋ひめやも (4681)

のように、引用のトと強調のシとに「年」の字を当て、訓

みを明らかにしている。六一九歌の「長四云者」を「長く」とし言へば」と訓ませるためには、助詞トを表記したはずで、諸注がトを訓み添えないのは、その辺りを考慮に入れてのことであろう。そこで「長くの下に引用を表す助詞トが省かれている」(『新編全集』)との見方がなされる。ウの立場をとる諸注釈は、「長くし言へば」の訓に拠りつつ、「長く」と「言ふ」との間に書かれない引用の助詞トを補って解釈するのである。しかし、トを補うについては慎重に検討する必要があるだろう。具体例を掲げ説明を試みるのが、『全注卷四』(木下正俊氏担当)である。

末長く愛しますとあなたが言うので。長クの下に引用の助詞トを補うと分かり易い。次の反歌の第二句「長く言ひつつ」も同様であるが、他にも、

赤見山草根刈り除け合はずがへ△争ふ妹しあやに
かなしも (14・三四七九)

まさきくて△妹が斎はば沖つ波千重に立つともさ
はりあらめやも (15・三五八三)

平けく△我は斎はむ (20・四三九八)

など、いずれも△の部分にそのトがあると解される例である。 (『全注卷四』)

『全注卷四』の掲げる三例を改めて検討しつつ、「言ふ」の前にトを補うことの問題点に言及したい。まず、東歌で

ある三四七九歌について。引用のトを補って解釈すると、
「赤見山の草まで刈り払っておきながら、させるものか」と
嫌がるあの娘が無性にいとしい」（『新編全集』口語訳）と
いう意味になる。これは、三句目にあるガへを、「くする
ものか」という反語的決意を表す東国語法」（『新編全集』
三四七九歌頭注）であるとした場合であるが、ガへの解釈
もまた揺れているのである。例えば、『全注巻十四』（水島
義治氏担当）は、ガへを東国語の反語助詞であるとする見
解に賛意を表しつつも、

…尤も「逢はすが上」（＝逢った上で。逢ったのに）

と解して、第四句を他の人に対して、「そんなことは
ありません」と言い争うあの娘が、と解することも間
違いであるとは言えまい。

として、断定を避けている。『時代別国語大辞典 上代編』
ではガへを、「未詳。全用例が東歌および防人歌中にある
ので東国語であろう」としつつ、二つの用法に分けている。
第一には「ナへと同じく、くする上に・くである一方で、
の意か」とし、

高麗錦紐解き放けて寝るが上にへ奴流我倍尔」あどせ
ろとかもあやにかなしき
（14三四六五）

と、三四七九歌を例歌とする。第二に「反語の意味をあら
わす助詞と思われる例がある」として、

・上野佐野の船橋取り放し親は放くれど我は離るがへ
（14三四二〇）
へ和波左可流賀倍

・我が目妻人は放くれど朝顔のとしさへごとと我は離る
がへへ和波佐可流我倍
（14三五〇二）

の二首と、防人歌四四二九歌とを掲げている。（四四二九
歌については後述。）ガへは「賀倍」とも「我倍」とも表
記され、表記上から両者を区別することは不可能である。

三四七九歌のガへについても、①「くが上」とする（『注
釈』『釈注』など）、②反語的用法（『新編全集』）、③ナへ
と同様と見なし「くする一方」とする（『総釈』折口信夫
担当）、④逆接的に「くだのに」とする（『私注』『全註釈』
など）といった具合に解釈が揺れているのである。三四七
九歌については改めて考えねばならないだろうが、トを補
うことの確実な用例とするのは避けた方がよいのではない
か。

ガへを含む歌として、次の防人歌も検討しなければなら
ない。

【概なる繩絶つ駒の後ろがへへ於久流我弁】妹が言
ひしを置きてかなしも
（20四四二九）

「馬屋の 繩を切つて出る駒のように 残るものか」（『新
編全集』）というように、上三句を女性の発言内容として
括弧でくくることが可能であろう。このガへは、『時代別

国語大辞典 上代編』でも「反語の意味をあらわす助詞と思われる」とされたものである。『全注卷四』では言及されることはなかったが、「言ふ」という動詞についてトを補った解釈が可能な用例である。しかし、四四二九歌と、三四二〇歌・三五〇二歌に見られるガへはいずれも終止形に付き、文を締めくくるものという性格が顕著である。また、東歌と防人歌にのみ用いられる上代東国語という特殊な例である点も勘案すると、四四二九歌を坂上郎女の怨恨歌の解釈にただちに援用することは、差し控えるべきではないだろうか。

さらに、『全注卷四』の掲げた残りの二例についてはいかがであろうか。いずれも「ま幸くて」あるいは「平けく」、「齋ふ」という例であって「言ふ」ではない。そればかりか、ここにトを補うについて解釈上の問題点も存在する。改めて二首を掲げる。

・ま幸くてへ真幸而へ妹が齋はば沖つ波千重に立つとも
障りあらめやも (15三五八三)

・大君の 命恐み 妻別れ 悲しくはあれど ますらを
の 心振り起し 取り装ひ 門出をすれば たらちね
の 母かき撫で 若草の 妻取り付き 平けくへ平
久へ 我は齋はむ ま幸くて はや帰り来と ま袖も
ち 涙を拭ひ むせひつつ 言問ひすれば：

(20四三九八)
三五八三歌は、遣新羅使人がその出発に際して交わした贈答歌、四三九八歌は家持が防人の為に思いを述べた歌である。いずれも旅立つ者と留守を守る家人との間に交わされる言葉として詠み込まれている。『全注卷四』では、これらにトを補い、「ま幸く」「平けく」と齋ふ、とした上で用例として掲げたのである。この解釈では、「ま幸く」「平けく」は、旅人の無事安泰を願う言葉であるということになるだろう。しかし、それが望まれるのは、必ずしも旅に出る者ばかりではない。

例えば、家持が防人の悲別の情を述べたという歌では、
：あり巡り 我が来るまでに 平けくへ多比良気久へ

親はいまさね つつみなく 妻は待たせと 住吉の
我が皇神に 幣奉り 祈り申して： (20四四〇八)

とあるように、「自分が帰還するまで、親が平けくあるように、妻もつつがなく待っていろ」との願いである。また、聖武天皇が節度使に酒を賜った際の歌では

食す国の 遠の朝廷に 汝等が かく罷りなば 平け
くへ平久へ 我は遊ばむ 手抱きて 我はいまさむ：

(6九七三)

とある。旅にある者が無事であるのはもちろん、旅人を見送る者、家を守る者もまた、旅にある者同様「ま幸く」

「平けく」あることが願わしいというのである。また、家持の「長逝せる弟を哀傷する歌」では

…ま幸くて 我帰り来む 平けく〔平安〕 齋ひて待てと〔伊波比氏待登〕 語らひて… (17三九五七)

とある。「元気で帰つて来よう、だから達者で待っているように」と言い残した自分は異国の地で生き永らえ、見送つてくれた弟は思いがけずも逝つてしまった。叶わなかつた願ひは、

ま幸くと言ひてしものを〔麻佐吉久登伊比氏之物能乎〕 白雲に立ちたなびくと聞けば悲しも (17三九五八)

と、反歌に改めてとりあげられている。家持は弟の死に對する落胆と悲傷の中でこの歌々をなした。旅に赴く者と家に残された者、兩者の平穩無事は、避け得ない「旅」によつて裂かれた者たちに共通する切実な願ひであつたはずである。『全注卷四』が掲げた二つの例(三五八三歌・四三九八歌)も、家人が「ま幸く」「平けく」あり、かつ「齋ふ」ことを歌っていると判断される。特に家持の四三九八歌では、「平けく我は齋はむ」という「我」の行爲と、相手への「ま幸くてはや帰り来」という願ひとは対比されているので、ここに引用のトを補うべきではない。怨恨歌の「長くし言へば」についても同様に、妥當な解釈が得られ

るのであれば、トを補うことは避けなければならない。にもかかわらずトを補つた解釈がなされるのは、冒頭に述べたように、坂上郎女の五二八・六六一歌に影響を受けてのものである。『注釈』は、これについて、

…「長くし云ふ」といふのは「長い間いふ」と解するのが当りまへで、前説(引用者注・本稿ではウ)の爲には「玉緒乃 長登君者 言手師物乎」(十三・三三四)

の例を見ても「と」のあるべき事が認められる。恋ひ恋ひて逢へる時だにうるはしき言尽してよ長常念者(六六二)

…あら玉の 年緒長 思来之… (十・二〇八九)

の兩者を比べても「と」の有無により、前説と後説(同、イ)とにわかれる事が認められる。にも拘らず前説に心惹かれるのはどういふわけか。…(中略)…清純な本能に生きる女性にとつては、殊に甘歳に至らずして最初の人を失つたこの作者には、長く願ひ念ひは切実であり、現に右に引用したやうに「長くと思へば」と訴へ、特に麻呂に對して「汝が来と思へば」(五二八)を「長くと思へば」にかけたと思はれる句のある事を考へると「長く」と云はれる事は何よりうれしいのであり、さればこそ「磨ぎし心をゆるして

し」といふ次の句との結びつきもいよいよ緊密になるのだと思ふ。

とする。「長くし云ふ」といふのは『長い間いふ』と解するのが当たりまへ」であるとしながらも、「長く」と言われることが、この作者にとつて何より嬉しいのだ、というしかし、「長く」と思ふ」とあるのを、怨恨歌の「長くし言ふ」に、直ちに結びつけてよいものであるうか。六六一歌では「言尽くしてよ」、つまり、様々に言葉を尽くすことが、二人の關係を続けていくための支えとして希求されている。同一作者の手になることを重視するならば、怨恨歌についても、「長く」の一言に限定したりせず、言葉を尽くす期間の長さが歌われていると理解する方が、より作者の歌いぶりに忠実なのではあるまいか。「長四云者」を表記通りに受け入れ、五二八歌や六六一歌の「長くと思ふ」と、怨恨歌の「長くし言ふ」との違いに留意すれば、イのように「長い間言い続ける」とする解釈を支持すべきであろう。

ここで、さらに検討しなければならないのは、ただ「言ふ」とあるだけで、男女間における言葉のやり取りを表現し得るのか否か、という点であろう。

・川千鳥住む沢の上に立つ霧のいちしろけむな相言ひそめてば
(11二六八〇)

・大君の命かしこみ出でくればわぬとりつきて言ひし呪なほも
(20四三五八)

二六八〇歌では、恋愛の始まりにおける互いの意思確認を「相言ひそむ」と表現する。交わされたのは、恋情の強さを証す言葉や、未来への誓いなどであろう。また、四三五八歌では、とりすがって様々にかきくどく女性の姿が、「わぬとりつきて言ひし呪」という句によつて表されている。しかし、具体的な発言内容が示されている訳ではない。また、次の二例

・大和の室生の毛桃本繁く言ひてしものを成らずは止まじ
(11二八三四)

・豊国の企救の浜松ねもころになにしか妹に相言ひそめけむ
(12三一一〇)

では、ともに上二句を序に費やし、「本繁く」または「ねもころに」と、「言ふ」という行為の様態は描写されるものの、恋愛の過程において交わされたであろう言葉を、一つ一つとり出しはしない。さらに、高橋虫麻呂の「葛飾の真間の娘子を詠む歌」では、

：望月の 足れる面わに 花のごと 笑みて立てれば
夏虫の 火に入るがごと 湊入りに 船漕ぐごとく
行きかぐれ 人の言ふ時：：
(9一八〇七)

とある。「行きかぐれ」という未詳の語句を含んではい

が、大勢の男たちによる娘子への求婚は、「人の言ふ」という句によって表現されている。怨恨歌において長歌と反歌に繰り返される「長く言ふ」という表現もまた、長い間求婚の言葉を贈り続けて来た相手の行為をいうものと考えられる。言い続けた時間の長さは、思いの強さと言葉の永續性とを保証するものとして扱われる。だからこそ、「長く」の語は助詞シによって強調されたのではないだろうか。しかし、それならばなぜ、過去からの時間の蓄積を表す「年深く」の句がこの前に並べ置かれる必要があったのか、検討しなければならない。

三

「年深く」の句は集中に、

・古の古き堤は年深みへ年深し 池のなぎさに水草生ひにけり
(3三七八、赤人)

・一つ松幾代か経ぬる吹く風の声の清きは年深みかも
へ年深香聞 (6一〇四二、市原王)

・磯の上のつままを見れば根を延へて年深からしへ年深
有之 神さびにけり (19四一五九、家持)

の三例を数えることができる。「年深し」は漢語「年深」の翻訳語であるとされ、初唐の李百葉や李嶠、駱賓王らの詩に、例が見られる。

・「和許侍郎遊昆明池」 初唐・李百葉

∴年深平 館宇 道泰偃 戈船

・「奉和幸長安故城未央宮應制」 初唐・李嶠

∴運改城隍變 年深棟宇摧

・「夕次旧呉」 初唐・駱賓王

∴地古煙塵暗 年深館宇稀

また、隋の孔德紹「南隱遊泉山」詩には、

∴歲積松方偃 年深椿欲秋∴

ともあって、「歲積」と対句となっている。漢語「年深」とは未来にわたって予定された時間を表すのではなく、振り返ることにより認識される、過去からの時間の蓄積のいであることが知られる。翻訳語である「年深し」もまた、過去からの時間の重みを感じさせる。怨恨歌六一九歌において、さらに「長く」が重ねられているのは、一つには時間の経過という事象こそ、強調されるべきものであったからであろう。しかし、単なる強調であるとは考えられない。求愛の時間の長さをいうために「年深く長く」と句を重ねた、その理由はどのように考えるべきなのか。

赤人の三七八歌において、経過する時間を池に堆積するようにいうものとして、「池」と「年深く」とが縁語的關係を有して用いられたことに言及されたのは内田賢徳氏である。内田氏は、赤人以外の用例は「翻訳語であることに

尽きる」とされたが、六一九歌の「年深く」も、他の句とのイメージ上のつながりを有しているのではなからうか。

改めて長歌を冒頭から見ると、「おしてる」という枕詞に始まり、難波という地名が提示され、さらにその地の「菅」と続き、それらが序となつて「ねもころに」という語が導き出される。一般に菅は、何らかの神性を有する植物として扱われる他に、根の地中深く延う習性を序の部分に利用される。つまり、その根の深さや長さを描写される素材であつた。

・奥山の岩本菅を根深めて結びし心忘れかねつも

(3三九七、笠女郎)

・奥山の岩本菅の根深くも思ほゆるかも我が思ひ妻は

(11二七六一)

・おほほしく妹を相見て菅の根の長き春日を恋ひ渡るか

(10一九二一)

・相思はぬ妹をやもとな菅の根の長き春日を思ひ暮らさ

む (10一九三四)

・咲く花はうつろふ時ありあしひきの山菅の根し長くは

ありけり

(20四四八四、家持)

「難波の菅の」は、すぐ下の「ねもころに」にかかる序である。しかし、そこに喚起されたイメージ——菅の根の密にからみつく様や、地中深く根をおろした様——は、続く

「年深く、長く」という句に至るまで揺曳しているのではなからうか。先に見た家持の四一五九歌（磯の上のつままを見れば根を延へて年深からし神さびにけり）においてもまた、つままの木の地中深く「根」を延っている様をとらえ、「年深からし」と慨嘆している。ここで植物の根と「年深し」とが共起しているのは、あるいは怨恨歌の表現によるのかも知れず、看過することはできない。これらの点から、「年深く」は単なる翻訳語ではなく、菅の根によつて「長く」と結びつけられていると考えられる。しかもそれは、菅を直接承ける「ねもころに君が聞こす」と「年深く長くし言ふ」とが、ともに菅の根のイメージに覆われているということでもある。

今「君が聞こす」と訓み、おっしゃるの意にとつたが、これには異論がある。原文では「君之聞四手」であるが、「注釈」はこれを、「君が聞かして」と訓み、郎女についての十分な知識を得るために「ねもころに聞く」と解釈している。¹⁰『注釈』は、助詞テが置かれていることから、「聞四」と「言ふ」とを時間的に前後するものとして、また因果の關係にあるものとしてとらえ、同じ動作ではあり得ないとの考えを示す。しかし、「ねもころに」の語は、

・思ふらむ人にあらなくにねもころに心尽くして恋ふる
我かも (4六八二、家持)

・ねもころに思ふ我妹を人言の繁きによりて淀むころか
も (12三一〇九)

など、恋しい相手への纏綿たる思慕や、また

言のみを後も逢はむとねもころに我を頼めて逢はざら
むかも (4七四〇、家持)

に見られるように、情の濃やかさを感じさせるものである。相手がどのような女性であるか、求婚する以前の身上調査のようなものを、「ねもころに」の語でもって表現するという理解には従えない。ここは「ねもころに聞こす」であつて、恋の相手に種々の言を尽くすことをいうのであろう。

「言ふ」であれば、先述の三一三〇歌に「ねもころに何しか妹に相言ひそめけむ」の例がある。「ねもころに聞こす」は求愛の言動の綿密さであり、その状態である。一方「年深く長くし言ふ」とは、その行為が長きにわたつて持続していたことである。男からの求愛の「ねもころに」と「年深く長く」といった二つの側面をいうのに、昔はまことに適した素材であつた。また、このように考えて初めて、

「聞こす」と「言ふ」とが単なる重複ではなく、その状態と期間の長さとの両面から、互いに補完しあうものとして置かれていることが理解できるのである。濃やかな心根と、その連続性を強調するという意図のもとに、菅の根の連綿と続く様態を借りて、この一見冗長とも思える表現――

「ねもころに君が聞こして 年深く長くし言へば」――が生み出されたのではないだろうか。

長歌では、男の訪れが途絶えた後の悲嘆の様の叙述に多くの句が費やされる。歌の主眼がこの後半にあるとしても、恋愛の始まる経緯、つまり、長期間にわたる求愛への言及もまた、重きをなすものであつた。それは、反歌に端的に表される。反歌の「長く言ひつつ」も長歌と同じく、「長い間言ひ続けて」と解釈すべきであつて、「現在」の悲嘆を招いた「過去」が、悔恨の中に顧みられているのである。

このような「過去」と「現在」の対比は、坂上郎女の
・まそ鏡磨ぎし心を許してば後に言ふとも験あらめやも
(4六七三)

・真玉つくをちこちかねて言は言へど逢ひて後こそ悔い
にはありといへ (4六七四)

という歌においても見られる。相手からの熱心な求愛の記憶、それを受け入れた瞬間を境界として、やがて訪れる悔恨、あるいは悲嘆といった心情とを対照させる点が共通している。かつての経験や胸に去来する思いが、このような形を選ばせたのかもしれない。しかし、歌の表現から郎女の人生を再現してみせることは不可能であるし、またその必要もないであろう。

結び

以上、長歌の「長くし言ふ」の句を中心に考察した。

「長く」が「年深く」の語とともに、歌い起こしの「おし
てる難波の菅」という素材を承けていること、直前の「ね
もころに君が聞こして」の句と、「年深く長くし言へば」
とが補足しあう役割を担うものであることを確認した。菅
という素材を選び、翻訳語であった「年深く」と、「長く」
とを結びつけて、「過去」を叙述する。このような重層的
な構成をなした坂上郎女の創意を、改めて強調しておきた
い。

坂上郎女には、「晩の萩の歌」と題された歌

咲く花もをそろは厭はしおくてなる長き心になほしか

ずけり (8一五四)

がある。大伴駿河麻呂の

相見ては月も経なくに恋ふと言はばをそろと我を思ほ

さむかも (4六五四)

は、郎女の作を意識したものと思われるが、「をそろ」と
は、会ってから一月も経たないうちに、言葉で恋心を伝える
性急さを指す。郎女の歌ではそのような「をそろ」は否
定され、「長き心」への希求が露わにされる。怨恨歌に示
された「年深く長く」言い続けることへの執着は、この歌

にも見いだされるのではないだろうか。

注

(1)

その他、主な注釈書の見解は以下の通りである。

ア こゝは今より行ききの、久しく長きかねていふ
なり (『古義』)

年久しく長く変わるまじと言へばの意で、行末かけ
て契る語である。 (『全釈』)

イ 年フカクは年久シクにて年フカクもナガクも共に
既往の事を云へるなり。 (『井上新考』)

長い間懸想するをいふ。行末長くの意ではない。
(『金子評釈』)

年のたつまで長いこと言ひ寄られるから。長く変
るまいと言ふからではない。 (『私注』)

「長くし言へば」は長く口説きつづけたので。反
歌(六二〇)の「長く言ひつつ」も、「つつ」に
よって、言い寄ることが長い間繰り返されたこと
を表している。 (『新大系』)

ウ <年深く>長い年月の間。「言へば」にかか
る。 (『新大系』)

<長くし言へば>「長く」とし言へば」の意。末長
く愛しますとあなたが言うので。 (『私注』)

<長くし言へば>末長く愛しますとあなたが言う
ので。長クの下に引用を表す助詞トが省かれてい
る。 (『新編全集』)

*ただし、『代匠記』(精撰本)は、イとウとにわたる理

解を示している。

「長四云者ハ、心長ク絶ス云ト、行末ヲ掛テ長ク云フトノ兩義アルヘシ」

(2) 坂上郎女の作

思はじと言ひてしものをはねず色のうつろひ易き我が心かも

〔不念常〕 曰手師物乎 翼酔色之 變安寸 吾意可聞

では、トが表記される

(3) この歌の「争ふ」についても、その対象を相手であるとするものと、世間の人々であるとするものに分かれている。現段階ではガへを「くする一方で」と見、恋の相手と小さな争いをする と解釈するのがよいと考えているが、今後の課題としたい。

(4) 「出雲国造神賀詞」の中に「かけまくも恐き明つ御神と、大八島国知ろしめす天皇命の大御世を、手長の大御世と齋ふとして云々」(大御世止 齋止)とあるが、当該例をあえてトの省略と考へなくともよいと判断する。

尚、『新編全集』では、四三九八歌について「何とか無事においてわたしたちは慎み守ろう。つつがなくすぐ帰つて来ておくれ」と口語訳されている。

(5) 「長く」と「し」との結び付きは、

大君の遠の朝廷と思へれど日長くしあればへ気奈我久之安礼婆 恋ひにけるかも

(15三六六八) (鈴木武晴氏の例によっても確認することができる。)

御教示による。

(6) 特に赤人の歌においては、「いにしへ」を「昔者」とし、「なごさ」を「漱」と表記するなど、漢籍の文字が意識的に用いられたとする小島憲之氏の指摘があり(『上代日本文学と中国文学(中)』塙書房、昭39)、また、それをうけて、時の経過を「古の古き堤」「年深み」と重ねて述べる表現について、初唐の駱賓王の詩「夕次旧呉」の「地古煙塵暗 年深館宇稀」という二句に見られる「地古：年深」という対句表現に支えられているのではないかとする指摘がある(清水克彦氏「いにしへの古き堤は年深み」京都女子大『女子大國文』94。昭58・12)。

(7) 時間の経過と植物の成長とが結び付けられた例としては、時代は下るが、唐の戴叔倫(西曆七三二〜七八九)の「寄贈翠巖奉上人」詩に「蘭若倚西岡、年深松桂長」の一節がある。また、白居易「隋堤柳」には「隋堤柳、歳久年深尽衰朽」とある。

(8) 「年長く」という表現の存在も想起される。憶良の「老いにたる身に病を重ね、年を経て辛苦み、また児等を思ふ歌」歌に、

…老いにてある 我が身の上に 病をと 加へてあれば 昼はも 嘆かひ暮らし 夜はも 息づき明かし 年長くへ年長久 病みし渡れば 月累ね 憂へ吟ひ … (5八九七) とあり、また「続日本紀」宣命 第二十三詔(天平宝字

二年八月庚子朔)には、

：年長久 日多久 此座坐波 荷重力弱_三 不堪_三負荷。

(…年長く日多く此の座に坐せば、荷重く力弱くして負ひ荷ち堪へず。)

ともある。「年深く長く」は、翻訳語である。「年深く」の他に、「年長く」という表現をも包含しているという可能性は否定できない。しかし、そのみでは、「深し」と「長し」とが、重ねられていることへの明快な答えにはならないのではないか。

(9) 「旅人の思想と憶良の思想」『セミナー万葉の歌人と作品 第四卷』和泉書院、平12

…これ(引用者注・三七八歌)は赤人が、亡き藤原不比等の旧邸の園池を詠む作、故不比等の往時にはそこに共に在り、園池に遊んだ記憶は、作者を今も満たしている。それと同時に、しかし主は今は亡く、池も荒れようとしている。回想しつつそこに降り積んだ時間を計るようにして作者は立っている。「年深み」は漢語「年深」の翻訳語(『古典全集』)で、…(中略)…詩の場合、これは「年久」が平仄の構成であるのに対して平仄の構成として同じ意味に用いるが、赤人歌の場合、単にそれによっただけでなく、池の縁語(『総釈』)として、特に深さを意味している。つまり一年を単位として重層する時間を、水底に沈んで堆積することのように言っている。後のこの表現の用法が

(10)

翻訳語であることに尽きるところと異なることになる。

「万葉集玉の小琴 別巻」において、宣長は、「乎は手の誤にて、君がきこして也、きこすは、のたまふといふ意に用ひたる詞也、下に云者とあるに重なるやうなれ共、かく重ねていふが古語のつね也、さてのたまふといふ事を、きこすといふ事、例多し」とした。以下は宣長の見解に対する『注釈』の批判である。(傍線は引用者による。)

…「て」が無くて「聞こし」といふのであれば下の句と並列の形になつて宣長のいふ「重て云が古語の常也」といふ事も認められるが、「て」を入れると上下に時間の前後が生じ、因果の関係も考へられるやうになる。

(11)

伊勢物語二十四段、三年間帰らぬ男を待ち続ける女に、新たな男が求婚する場面に、

…男、宮仕へしにとて、別れ惜しみてゆきにけるままに、三年来ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、「今宵あはむ」とちぎりたりけるに、この男来たりけり(小学館『完訳日本の古典 10』より)。

とあるのも参考となる。

(12)

イの説をとる『新大系』が「長く言ひつつ」の「つつ」の語に触れて、「つつ」によつて、言い寄ることが長い間繰り返されたことを表している」とするもの、従うべき指摘である。

*資料中に引いた万葉歌は、原則として小学館『新編日本古典文学全集』によった。便宜上、一部原文表記になっている。

(付記) 本稿は、上代文学会創立五十周年記念大会における研究発表、「大伴坂上郎女の『怨恨歌』——年深く長く——」を基にしたものである。席上で御質問や貴重な御意見を賜わりました先生方、また、稿を成すにあたって御教示下さいました先生方に、記して感謝申し上げます。

『上代文学』投稿規定

- 1 投稿者は会員に限る。
- 2 投稿論文の分量は四百字詰め原稿用紙四十枚以内(注をも含む)とする。
- 3 投稿論文はワープロ原稿をも認めるが、その場合にはなるべく字間・行間をゆつたりと組み、表紙に四百字詰めに換算した枚数を記す。
- 4 投稿論文は原文でなく、コピー二部を送る。
- 5 投稿論文の表紙には、投稿者の住所及び勤務先(学生の場合は大学名、学部学科名または大学院課程名、学年)を記載する。
- 6 投稿論文の送り先は事務局とする。
- 7 投稿論文の締切日は特に設定しない。
- 8 投稿論文に対しては、部分的修正を要求する場合がある。
- 9 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て常任理事会で決定する。
- 10 投稿論文は返却しない。不採択の論文についてはその旨を通知する。